

5分でも早く帰宅を！

すべての学級に起こりうること②

2019.09.03

No.76

校長 渡邊 幸二

全国学調のデータの説明の前に、働き方改革のことを…。

下の表は、昨年度の3月に時間外勤務の目安として、**月45時間以下、年間360時間以内のモデル案**として示したものです(校長室だよりNo.56)。年度初めの繁忙期にはぎりぎりの時間を、夏休み等の閑散期には少なめの時間を割り振ったものです。そのさらに下の表に、現在の先生の状況を入れてみました。出退勤表を提出してくださっている先生は、実際にどれだけオーバーしているかわかるとおもいます(「先生は？」の欄)。全体の傾向がわかるように、平均の時間も入れてみました。

モデル案	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
残業時間上限	45	45	45	30	10	30	30	30	30	20	25	20
残業時間累計	45	90	135	165	175	205	235	265	295	315	340	360
先生は？	4月	5月	6月	7月	8月	9月	平均	4月	5月	6月	7月	3月
残業時間							残業時間	53.1	55.0	52.9	51.8	
残業時間累計							残業時間累計	53.1	108.1	161.0	212.8	

平均ですら月45時間を上回ってしまっています。これが毎月続いているので、年間の合計は360時間をはるかに越えてしまうでしょう。この上限を超えたからといって、ガイドライン上、罰則規定があるわけではないのですが、このままでは先生方の疲労が、心身への過度のストレスが目に見えて溜まっていくでしょう。

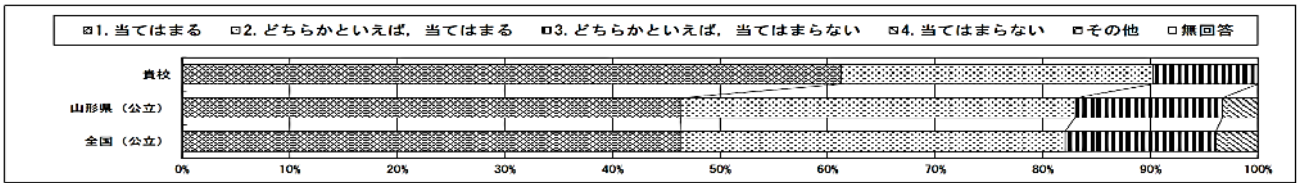
そして、このご時世で一番問題となっているのが、先日の新聞報道にもあるように、そんなブラックな職場には、労働力不足の現在、**志願者が激減している**ということです。しかも、これから大量退職を迎えるというのに…。

校長室だよりNo.74でも示したような改革を進めては行きますが、すぐに改善できるものばかりではありません。地域の方やPTAのみなさんと話し合いながら少しずつ減らそうというものが多なのが現状です。本来であれば、国がもっと本気で、特に何といっても人的支援に取り組まなければ、根本的な解決には至りません。

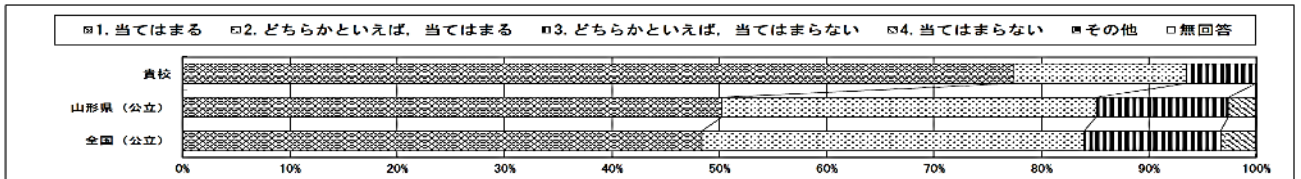
先生方からは、ご自分の命を守るためにも、可能なかぎり早く学校を離れるということをお願いするしかありません。“業務が減らないのに、要求ばかりするくせに無理だろ！”とお叱りを受けそうですが、**まずは在勤時間を減らす**ことを意識的にやってみていただきたいと思います。



質問番号	質問事項										
(52)	算数の問題の解き方が分からないときは、諦めずにいろいろな方法を考えますか										
選択肢	1	2	3	4	5	6	7	8	9	その他	無回答
貴校	61.3	29.0	9.7	0.0						0.0	0.0
山形県(公立)	46.3	36.7	13.7	3.3						0.0	0.0
全国(公立)	46.3	35.7	14.0	3.9						0.0	0.0



質問番号	質問事項										
(54)	算数の授業で公式やきまりを習うとき、そのわけを理解するようにしていますか										
選択肢	1	2	3	4	5	6	7	8	9	その他	無回答
貴校	77.4	16.1	6.5	0.0						0.0	0.0
山形県(公立)	50.2	34.8	12.3	2.6						0.0	0.0
全国(公立)	48.4	35.6	12.7	3.2						0.0	0.1



ジャンプすること

E. K先生が、毎日、本当に魂を込めて届けてくださるマイスター・レポートを読んでも、子どもたちみんなが悩み、課題を解決することにのめり込むような**ジャンプ**の課題を提示することは、本当に難しいと思います。しかし、だからと言ってそれをやらなければ、つまりこれまでのような、いくら形がグループになっているとはいえ、ほぼ一斉授業と変わらないような、教師が教え込むような、わからせることに執着したような、ある意味昭和の授業を続けている限り、これまで示したようなデータ(児童質問紙46, 47, 49~52, 54)は出てこないでしょう。つまりそれは、我々が、子どもたち**自らの力で未来を切り拓いていく力を育てていない**と言えるのではないのでしょうか。

私たちは、昨年までの学校研究で、以下のような反省(失敗)をしたはずです。

われわれは昨年度までの取り組みで、**失敗させること**の大切さ、結果だけではなくその**過程を大事にすること**を学びました。それは、別の言い方をすれば、先生が困るのではなく、**子どもが困り、悩む指導の在り方**です。また、下位児童を引き上げようとする易しい問いを発したりドリル学習を強いたりするよりも、**ジャンプの課題など高みの問題**で子どもたちを揺さぶり、その気にさせる指導が、結果的にどの子も伸ばすことを学びました。(学校経営方針P2)

全国学調の結果、本校の子どもたちはそういうことを我々に教えてくれているのです。そこに耳を傾けず、再び同じ失敗をするのはとても残念なことです。

